

# AMDAダイジェスト

発行：1997年6月

発行元：〒700岡山市橋津310-1

AMDA (アジア医師連絡協議会)

TEL086-284-7730 FAX086-284-6758

InterNet : <http://www.amda.or.jp>

編集者：田代邦子, 大谷直美, 飯島恵美



## AMDAと私

AMDA 副代表 中西 泉

バブルとか円高とか急に膨らんだものが最近多いけれど、ボランティアという単語の価値も急騰し、やるのが今や一種のステータスシンボルである風潮も感ぜられて、そんなものかな、と疑ってしまう。こう書いてくると斜に構えていやな感じだと思ふ人も多いことだろう。信じて疑わず奮進できればそれもいいが、懐疑的に物事に対処する人間もまた居るのである。私がAMDAに入ったのは1989年のことである。小林副代表につれられて早稲田奉仕園でのAMDA総会に出席したのが縁であった。小林先生とは医学部で私が2年先輩ではあったが、付合は寧ろ卒業後、外科学教室で一緒になってから生じたといつて良い。外科はチームワークがなければやっていけない。その中で生じた信頼関係は深いものがあり、後年小林先生が開業したときも、都道府県は異なるとはいえ、近いので早速連絡し、暫く途切れていた交流が再び始まったのである。小林国際クリニックを受診した在日外国人で手術を必要とする患者を依頼されるようになり、これを手掛けるうちに考えさせられる事が多くなってきた。健康保険のない人にどのようにして医療を提供したらよいか。医療保障のない人間に医療は存在しないのだとは一見誰も考えないだろうが、現実にはこの段階で断ってしまう医者、医療機関が意外に多いのである。制度も時代の産物であって未来永劫不動不滅ではないと私は思うのだが、国民皆保険制度で国が余りに面倒を見過ぎると医者も患者もこれへの依存が強くなり、コスト意識が麻痺してしまうのである。またこれとは反対に、単に可哀相だからということで治療費を極端にダンピングしたり、或いはただにしたらどうなるか。これも冷静に考えれば分かりそうなものだが、案外名の知れたマスコミですら医療機関が恰も搾取するかのとき論調を展開し、安易な感傷に訴えようとするのもみてきた。こんな経緯もあって小林副代表の尽力でAMDA国際医療情報センターが生まれ、気が付いてみると自分もAMDAの一員になっていたというわけである。従って私の所属した由来は実務上の事が引き金になっており、それ程高い志に根ざしたのではなく、ボランティアと呼ばれるには憚りがあるのである。このような人間もみとめるAMDAはいい加減というべきか、鼎の軽重を問うべきなのかは穿鑿しないがやはり包容力に富む組織なのだろう。そうではあっても医療というものを改めて考えるきっかけを与えてくれた事で私はAMDAに深く感謝しなければならない。阪神淡路大震災以来、自分が病院団体に属していた事が幸いして全日本病院協会や東京都病院協会とAMDAの間に連携が生じ、互いに刺激になっている事は多少なりともそれぞれの組織に対しての恩返しになったかと自負している。組織を壊すのは簡単である。これを作り上げ、育て、他の組織と連携して行くのは数倍の労力を要する大変な事である。AMDAもまた組織としての対応を要求されるような節目を迎えている。海外活動参加は中々困難で微力でもあるが連携の一役を担うことでAMDAに貢献できれば幸い、と思っている。

## クワイ河移動診療所プロジェクト開始

(国際医療協力 vol.20 No.4 より抜粋)

菅波 茂

AMDAの源流である岡山大学医学部クワイ河医学踏査隊25周年およびクワイ河平和基金10周年記念事業として、タイ国カンチャナブリ県医療過疎地において移動診療所プロジェクトを実施することになった。カンチャナブリ県の山間部、特にタイ、ミャンマー国境付近に点在する農村地域および少数民族地域ではマラリアや下痢などの熱帯性疾患、肺炎などの呼吸器疾患そして歯科疾患等が蔓延し、地域住民は気軽に医療サービスは受けられない状況にある。このため移動診療プロジェクトが企画された。内容は巡回診療、健康指導そして保健教育の実施である。診療活動の対象者は一日約200人が見込まれている。診療活動においては地元の村長や保健ボランティアと緊密な連絡を取り合い、対象地域の選定においてはカンチャナブリ県保健局担当者と相談することになる。具体的な実施方法はAMDAクワイ支部を創設し、国際的な協力体制のもとにプロジェクトを実施する。移動診療所は地域医療活動に必要な機材を搭載した車両を巡回させる。この車両は最高裁判所所有の移動診療車を借用することになる。この診療車でタイ人医療チームが1ヶ月に1回医療過疎地域を巡回する。これに日本からのボランティアが参加することになる。

AMDAの存在はクワイ河平和基金の主宰である永瀬隆氏の存在抜きにして考えられない。なぜなら昭和46年にクワイ河の上流に派遣された第一次岡山大学医学部クワイ河医学踏査隊の活動の場は永瀬氏から紹介されたモン族の開拓農場であったからである。永瀬氏は太平洋戦争中憲兵隊通訳として「泰緬鉄道」建設に参加した。「死の鉄道建設」といわれたこの鉄道建設にまつわる悲惨な出来事を日本側から最後の最後まで体験した唯一の目撃者である。帰国後50年間にわたって一人で「泰緬鉄道」戦後処理を行ってきた人である。クワイ河平和基金は彼の講演料、著作料そして彼に寄せられた寄付が財産となっており、貧しい家庭や少数民族の子たちの看護婦コースの奨学金である。一方、タイ国内閣副官房長官 陸軍少将 ソーンチャイ モトリワット氏は1945年生まれであるが、彼の父は太平洋戦争中はカンチャナブリ県知事として憲兵隊通訳の永瀬氏と折衝していた。永瀬一モトリワット一菅波の個人的つながりが移動診療所プロジェクトの基盤である。



**AMDA Nepal 子ども病院建設プロジェクト**

(国際医療協力 vol.19No.12 より抜粋)

AMDA Nepal 代表 ラメシュワル・ポカレル

## 1) 背景

発展途上にあるネパールは、いまだ多くの問題を抱えている。人口は急激に増加しているが、資源もなく産業も育っていない。その中でも産業、施設、人材の配分がカトマンズなどの都市にかたよっており、地方はその恩恵を受けることはほとんどない。そして、一番憂慮されるのが、こうしたしわ寄せが子どもやその母の命を蝕んでいることだ。衛生観念は低く、医療サービスも欠如している。全人口の44%が15歳未満で、1000人中6人の母親が妊娠、または出産時の異常のため死亡している。1歳未満児の死亡率は1000人中100人を越え、毎年8万人近い子どもが治療を受ければ助かる下痢・赤痢・呼吸器疾患で死亡している。ネパールにおける子どもと女性の保健医療環境の改善がいかに急務であるかを示している。政府にとって解決すべき問題の一つだが、財源的にも政策的にも十分な対応が取られているとは言えない。ネパールにある子どものための病院は、首都・カトマンズに一つあるだけで、それも200ベッドしか備えてない。これは4万人当たり1ベッドという状況であり、大変深刻な問題である。

山々で遮られた移動に大変な時間を要する国土で、中東部にあるカトマンズ以外に拠点となる病院を設立することが重要だ。この子ども病院建設は1993年からAMDANepalの最優先課題になった。

## 2) 地域社会(プトワール市)との連携の模索

関係専門家や賛同者との討論と計画の練成を重ね、1995年初め、私たちはブッダの生誕地・ルンビニから東北へ45kmにあるプトワール市を初めて訪れた。いかなるプロジェクトも地域の参加がなければ実行は困難だ。その点で私たちは満足のいく結果を得た。候補地はディーブナガルというプトワール市当局第9区に決まり、現地プロジェクト運営委員会を設置した。

## 3) 夢が実現へ

病院建設には財源的な裏付けが必要だ。1995年暮れ、AMDA Japanが毎日新聞社の国際交流賞を受賞した際、子ども病院建設についてAMDA Japanの菅波茂代表が我々の計画を話し、同社が協力の検討に入った。1996年6月、私は毎日新聞社の蓮見新也記者ら2人の記者とともにプトワール市を再訪し、市と商工会議所に上記の約束事項の確認を行った。この後、毎日新聞社はAMDA Nepal 子ども病院建設の必要性について、1週間の連載記事と数々の特集紙面でキャンペーンを展開し、日本の市民から高い関心と予想を超える善意が集まりだした。子ども病院建設はこの時点で実現に向け大きく動きだすことになった。さらに、毎日新聞社は国際協力に関心の高い団体・企業にも協力を要請、大阪ガス・松下電器労組・大阪よどがわ市民生協などが加わり、日本側で子ども病院建設委員会の準備会が発足する。当初見込みでは、病院建設に必要な最低限の資金調達今年中には難しいと見られていたのが、多くの日本の市民の善意、関係団体の協力のおかげで建設資金が集まった。感謝したい。

## 4) 今後の展望

私たちは、この病院を軌道に乗せ、母子医療の拠点として発展させていく計画を持っている。建設予定地は7haの土地を確保しており、1) 医師・看護婦・保健指導員などの育成を図る研修センター、2) ネパールの子どもと女性の健康状態改善のための調査及び効果的な治療技術の採り入れを目的とする母子保健センターとインターナショナルトレーニングセンター、3) 外国人ボ

ランティアを受け入れるボランティア・トレーニングセンターなどの機能を兼ね備えた総合的な国際研修センターへと発展させた。しかし、当面は病院建設と運営に全力を挙げ、メンテナンスは現地でまかなう体制をつくり、将来的に外部からの援助なしにやっつけられる自立運営体制を確立したい。

最後に、AMDA Nepal 子ども病院は、日本人とネパール人の友情の証であり、今回の病院建設をきっかけに、この友情が永遠に続くことを確信している。物質的なものだけでなく、多くの知恵や技術、熱意に支えられる中で、「友情」を大きく育てていくために頑張りたいと思っている。

**AMDAネパール子ども病院**

(国際医療協力 vol.20 No.3 より抜粋)

毎日新聞社会部記者 蓮見 新也

阪神大震災でアジア・アフリカからも救援の手が寄せられた「友情」に、目に見える「お返し」をしたい。途上国と日本の読者を紙面でつなぎ、昨年、18年目を迎えた毎日新聞と毎日新聞社会事業団の「飢餓・貧困・難民救済キャンペーン」は、新たな意味を持って始まった。アジアで最も貧しいネパールで、治療を受ければ助かる子どもたちの命が次々と失われ、5歳未満児の死亡率は日本の約20倍。これを改善しようと、AMDAネパールの医師らが子ども病院の建設計画を進めていた。この運動に協力することで、日本とネパールの、アジアの心をつなぐ新しい「形」をつくれるのではないか。昨年6月の1ヵ月間、ネパールを訪れ、貧しさゆえに命を脅かされている子どもたちやその母の姿を取材した。実態を知り、まず自分自身が病院建設の必要性・実現性を見てこなければならぬ。そのための現地取材でもあった。日本人の多くは、ヒマラヤの美しさをネパールのイメージとして描いている。しかし、ネパールの貧しさは、そのヒマラヤのふもとでの厳しい自然環境が大きな要因だった。そこから派生してくる児童売春、児童労働、街にあふれるストリートチルドレン。医療、保護、教育、職業訓練、環境改善など、あらゆる分野から、国連機関・ネパール政府・NGOなどによる努力が行われていた。首都・カトマンズにある国内唯一の小児専門病院は全国からの患者で悲鳴を上げ、「子ども病院が欲しい」という声をあちこちで聞いた。

帰国後の7月から、連載「明日を生きたい」や特集記事で、子どもたちの窮状と、病院建設への呼びかけを続けてきた。病院ができるまで続けよう。2年越しのキャンペーンも覚悟していたが、予想を上回る読者の反響と善意の輪の広がり、病院は今春にも着工の節目を迎える。AMDAネパールのポカレル代表らの熱意。その「芽」を計画案にまで煮詰めて育て、キャンペーンへの橋渡しをしてくれた小児科医、故・篠原明さん。それを引き継いだ兵庫県立こども病院医師の連利博さん。資金協力を申し出てくれた大阪ガス小さな灯運動、松下電器労組、渋谷ライオンズクラブなどの関係者。基本設計を申し出てくれた建築家の安藤忠雄さん。AMDA本部のスタッフ。一人ひとりの心が、無数の読者の善意を支えに、大きな実を結んだのだと思う。

この2月、4月にも着工の記事を書いたが、こんなに早く実現を報告できたことに大きな喜びを感じている。もちろん、病院の今後が大切なのは言うまでもない。しかし、ネパール東南部のダマック市で、小さなAMDA病院が、地域の中核病院として活動している姿を私は現地で見てきた。今回の病院は、南部の拠点になると確信している。この病院を核に、ボランティア研修センターの併設などの構想も練られつつあり、将来の発展へと夢も広がる。今後も紙面でフォローし、応援し続けたいと思っている。

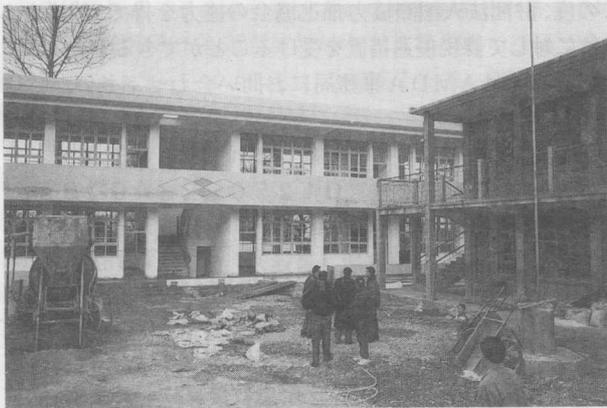
**AMDA 支援小学校 3月新学期までに完成予定**

(国際医療協力 vol.20No.2 より抜粋)

AMDA 中国 調整員 笹山徳治

2月1日よりAMDA中国のスタッフ4名で「2・3大地震一周年記念」の行事に出席のため麗江地区衛生庁教育委員会の招待で現地を訪れる。到着後、ただちに96年3月より支援を続けている、拉市郷中心完小学校へ行く。外壁はほぼ完成した立派な校舎に感動する。内装の仕事がすれば、3月より子供たちは新しい校舎で学べること。建物は写真の通りで、二階建て鉄筋コンクリートで、耐震性も当初の計画より強められている。教室は8教室で、生徒285名の全員を一度には収容できないため、午前と午後の2部授業で取り組まれる。旧校舎(写真右側)を修理すれば、全員の収容と職員室の確保が可能と思われる。また、AMDA中国としては保健室とシャワールームを建設する計画でいる。

地元の多くの子供たちは日本からのスタディツアーをはじめ岡山県内の学校関係者、各種会社、団体の皆様からの暖かい御支援に感謝している。また、この一年、余震の中、テントの暗い教室で一生懸命がんばった地元の教育関係者や、村人、政府機関の人々もAMDAの相互扶助の精神を充分理解してくれたことと思う。このプロジェクトは80%は達成しているが、この地域の貧困、健康、医療衛生への課題は今スタートしたばかりであり、今後は保健室(小さな診療所)のソフト面、初歩的医療器具、人材の育成等の充実をはかる予定である。



小学校建築現場

**AMDA 高校生会活動報告**

(国際医療協力 vol.20No.3 より抜粋)

3月4日よりAMDA高校生会による中国雲南省大地震・学校再建活動へのお礼として、雲南省の子供たちから贈られた絵の絵画展が開催されました。最終日にAMDA高校生会から今回の絵画展までの報告が行われました。

私たちAMDA高校生会は、阪神大震災などをきっかけにボランティアに興味を持った高校生たちが集まり、おとしの9月に発足しました。

昨年4月にメンバーが増えたので、2月3日に起こった、中国雲南省大震災におけるAMDAの救援プロジェクトの一環である「学校再建プロジェクト」に参加することに決め、高校生会独自の活動を始めました。

まず最初に岡山県下の小、中、高の学校に募金を呼びかけました。すると幾つかの学校がそれに応じて募金や文房具を集めてくれました。私たち高校生会も街頭募金を行いました。支援の輪が

どんどんひろがり、企業や団体等からも募金が届きました。それらを持って、高校生会メンバー7人と大学生5人が8月に中国へ行き、実際に現地を視察しました。現地では小学校を訪れ子供たちと交流を深めました。

私たちは高校生会の活動を通して、ボランティアをするには、まず自分の出来ることを何でもいいから始めること。そしてそれを継続することだと思いました。そうしていれば、自然と周りの人たちが協力してくれる。例えば、私たちがAMDA高校生会を発足させたのは本当に小さな一歩に過ぎなかったけれども、それがこうして現在では、中国雲南省拉市郷中心完小学校の校舎はほぼ完成に近づいています、そんな大きなものになったのです。

子供たちの使う文房具はまだ十分ではないし、震災にあった村ではケガや病気を治す小さな診療所もありません。私たちはこれからも、文房具を集めるために、村に診療所を建てるために街頭募金などをしていきたいと思います。そしてまた、中国を訪ねたいと思います。

最後にいろんなところで私たちを支えて下さった人々にお礼を言いたいと思います。

ありがとうございました。

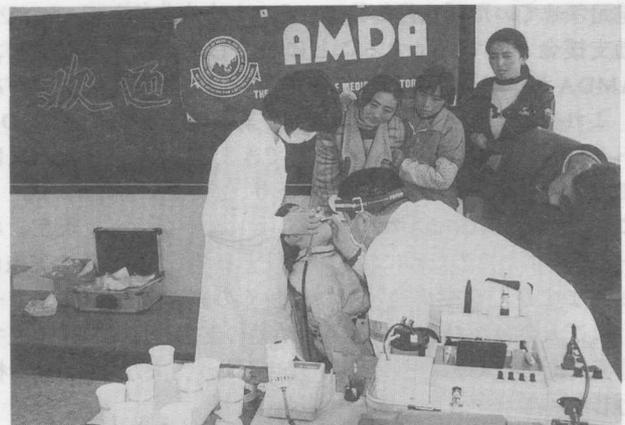
AMDA 高校生会一同

**中国雲南省歯科医療プロジェクト**

1997年3月より1年間をめぐり、雲南省の拉子郷小学校を拠点として、歯科診療と歯科保健教育への支援活動が開始された。このプロジェクトは毎月1回、日本より歯科医療スタッフが現地へ行き、中国人民病院との共同治療というかたちで実施される。

第1回めは、歯科医療スタッフとして岡山市内の島津歯科医師、磯島歯科衛生士、福永、湯浅両歯科医療器材技術者、笹山AMDA中国調整員の5名で実施され、津島医師より中国人民病院へ歯科用医療器材の寄贈も行われた。

今回は中国の子どもたちの口腔状態の調査とともに200名の治療が行われたが、1年生～6年生までの子どもたちの乳歯及び永久歯、特に臼歯(6才臼歯etc...)の状態が想像以上に悪く、学校保健の再考、母親学級や母子保健の確立等、今後このプロジェクトを継続して行く上での課題が揚げられた。島津歯科医師は子どもたちの状態に対して食生活に問題があるように思います。麗江はお茶の産地です。お茶にはフッ素がいっぱい含まれ歯にとっても良いのです。お茶を取り入れた予防法はないものか考慮中です。と治療だけでなく具体的な予防法について考慮していく必要性を語った。



歯科診療現場

## 広がるAMDA支援の催し

学校、団体、企業の皆様によるAMDAへの活動支援コンサート、講演会、バザー、パネル展、レクレーション、スポーツ大会あるいは支援商品の開発等が次々に行なわれ、AMDAスタッフ一同大変感謝しております。皆様からの様々な支援プランにより、AMDAの活動はより円滑に、より充実した活動ができました。今回のAMDAダイジェストに紹介いたしました、AMDAネパール子ども病院、中国雲南省学校再建等プロジェクトも皆様からの支援の成果の一例と言えます。今後ともどうぞ末永くご支援下さいませようお願い致します。ご支援下さった企業からのメッセージをご紹介致します。

## 後世へ正の資産を

全日信販 AMDAカードデスク 水野 省吾

私たちは、後世に生きるものの特権として過去の歴史を学ぶことができます。例えば、いまからおよそ100年前にあたる19世紀の90年代には、日清戦争(1894年)や米西戦争(1898年)があり、日本は台湾を、アメリカはフィリピンとグアムとをそれぞれ占領し、他の列強各国も植民地の拡大に躍りになっていました。当時を生きた人々にとって、戦争は自国の発展にとって正義の戦いと信じ、被征服民族の人権などはほとんど考慮されていませんでした。しかしながら、帝国主義の結末はまことに悲惨なものとなり、人類は大量の死傷者と国土の荒廃とを代償に歴史から「失敗」を学びました。

さて、100年後の人々からみた現代とはどのような時代なのでしょう？ 同時代を生きる私たちにとっては、もちろん知る由もありませんが、私たちは後世へ確実に何かを残すことになりま。そして、正の資産か、負の資産かは後世の人達の判断に委ねることになるわけですが、例えどんなに小さくとも正の資産だけを残していきたいものです。

このようなことをほんやりと考えている時に阪神淡路大震災があり、そしてAMDAの活動を知りました。灯台下暗しとはこのことでした。本当に身近なところで正の資産となる活動が地道に行われていたのです。早速、AMDAの活動を支援することで着実に正の資産を残していくための企画を練り、昨年4月、「AMDAカード」を発行するに至りました。

現在、クレジットカード業界では、個々のお客様にキャッシュバック等の還元を行うサービスが多くなっておりありますが、実際にはひとりひとりのお客様への還元額はあまり大きいものではありません。しかしながら、それを合計した場合には、かなりの規模になります。そこで「AMDAカード」では個々のお客様に利益を還元させていただく代わりに、そのお金を集約してAMDAへ活動支援金として寄付することにしました。おかげさまで、「AMDAカード」は発行当初から各方面より大きな反響があり、これまであまり交流のなかった業種の方々とも「AMDAカード」を通じてお会いすることができました。これもひとえにAMDAの皆さまのご活躍の賜物であり、感謝しております。

この4月で「AMDAカード」発行1周年を迎え、現在、ネパールの子供たちのために学校を建設するキャンペーンを実施しておりますが、今後、ひとりでも多くの方々に「AMDAカード」にご入会いただき、AMDAの活動の支援を通じて、地道でも着実に後世の人々に正の資産を残せるよう、微力ながら精一杯努力していきたいと思っております。



カンボジア支援の講演会で講演する有森裕子さん

## ご寄付のお願い

世界には地震、台風等の自然災害で苦しむ被災者や、発展途上国で貧困にあえいでいる多くの人々がいます。また世界中に3千万人以上もの人々が、戦争のために家や家族を失い、難民となって毎日困難な生活を強いられています。AMDAは今後も皆様一人一人の善意を大きな国際貢献の力としてこれらの人々に届けて参ります。

この度、財団法人国際協力推進協会の協力を得て、皆様からのご寄付に対して課税優遇措置を受けることができるようになりました。詳しくはAMDA事務局にお問い合わせ下さい。

寄付送金先	名義はいずれも	AMDA
郵便振替	口座番号	01250-2-40709
	中国銀行一宮支店(普通)	1272011
	第一勧業銀行岡山支店(普通)	1816947

## 本年度開始AMDAプロジェクト

- '97.1: マレーシア国サバ州洪水緊急救援プロジェクト(終了)
  - '97.1: 福井県三国町タンカ重油流出事故救援プロジェクト(終了)
  - '97.2: アフガニスタンABCプロジェクト
  - '97.3: イラン震災緊急救援プロジェクト(終了)
  - '97.3: 中国雲南省歯科医療プロジェクト
  - '97.5: ネパール子ども病院プロジェクト
  - '97.5: イラン東部地震緊急救援プロジェクト
  - '97.5: バングラデシュサイクロン緊急救援プロジェクト
  - '97.6: タイ・クワイ河移動診療プロジェクト
- 上記を含め現在40のプロジェクトが継続中。

## 編集後記

- ・7月5日(土)~11日(金)まで広島県と共催で、広島国際協力センターにて「NGOカレッジ」が開校されます。その後、講義録が出版される予定です。(田代)
- ・2月末まで使用済みテレホンカード収集キャンペーンを行っています。収益は途上国の子供たちへの医療品等の費用となります。(大谷)
- ・やっと自宅でAMDAのホームページが見られるようになりました。(飯島)